

特 258

483

再板
大本能寺食戰

太切記

貳段目

麻呂

正眞上
紙住入

三九

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始



483
254

繪本太師記 本能寺後

諸同音
麻の青は此の青もかぞ

あは
装のあはしはあは形る

同音
庵もすれうう者かあ

八
人かあけえああた



おんあぢなむをむすそふ
おんあぢなむをむすそふ
おんあぢなむをむすそふ
おんあぢなむをむすそふ
おんあぢなむをむすそふ
おんあぢなむをむすそふ
おんあぢなむをむすそふ

大坂一ノ宮

あぢなむをむすそふ
あぢなむをむすそふ
あぢなむをむすそふ
あぢなむをむすそふ
あぢなむをむすそふ
あぢなむをむすそふ
あぢなむをむすそふ

かへりてあはれみこころを
成後なるあはれみこころ
いさむる心死すやうく
あはれみこころあはれみ
あはれみこころあはれみ
あはれみこころあはれみ

あはれみこころ

あはれみこころあはれみ
あはれみこころあはれみ
あはれみこころあはれみ
あはれみこころあはれみ
あはれみこころあはれみ
あはれみこころあはれみ

空今と教女を二変六條
教の籍と上翁前を
心あり大なり因りる丸
水ありはは有田務家重
心あり是くは有田務家重

五

尾田まきまきありのほほま
子かづつとあま丸なる酒の
如くはあり大欵ハテ局まが
同くありのほほまび場の
心ありはは有田務家重

そりーのまじり興女おむらわろ
おむらわろのまじり興女おむらわろ
もあんなの興女おむらわろ
おむらわろのまじり興女おむらわろ
おむらわろのまじり興女おむらわろ
おむらわろのまじり興女おむらわろ

おむらわろ

遠くおむらわろのまじり興女
おむらわろのまじり興女おむらわろ
おむらわろのまじり興女おむらわろ
おむらわろのまじり興女おむらわろ
おむらわろのまじり興女おむらわろ
おむらわろのまじり興女おむらわろ

の地まのち後のまの
妹たお誘れ教ひのま
初まの安も香もある
殿におう飲香あち件
まあこの物に下奉も

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

まひて婿いお花の
まのそのかねつあまの
雲紙七と所内なま
女房づか傍ぬ指があ
ちとひていひひあ

ひんごも松葉の葉も
花も丸く風情し
もみほほ葉丸も
かのもちあひえ
が梅ひげつぎの
お

梅葉十

あまのむらさき
あまのむらさき
あまのむらさき
あまのむらさき
あまのむらさき
あまのむらさき
あまのむらさき

あつゝいふ物矣つ國の陸
まかふるまの構はまの
ねほらつて入るまの
今想はる人具あはる
中ほい今あはるまの

あつゝいふ物矣つ國の陸
まかふるまの構はまの
ねほらつて入るまの
今想はる人具あはる
中ほい今あはるまの

海^{ウミ}の^ノ波^{ナミ}の^ノた^たり^りと^と風^{カゼ}
も^もの^の清^{スミ}く^く深^コら^ら数^スま^ま
ぬ^ぬに^に大^{オホ}なる^る女^メ方^{カタ}う^うう^う深^コみ^み
か^か余^ヨに^にゆ^ゆな^なも^もあ^あけ^け
の^のま^まあ^あつ^つあ^あつ^つい^いて^て

古切中十歌

海^{ウミ}の^ノ波^{ナミ}の^ノた^たり^りと^と風^{カゼ}
も^もの^の清^{スミ}く^く深^コら^ら数^スま^ま
ぬ^ぬに^に大^{オホ}なる^る女^メ方^{カタ}う^うう^う深^コみ^み
か^か余^ヨに^にゆ^ゆな^なも^もあ^あけ^け
の^のま^まあ^あつ^つあ^あつ^つい^いて^て

のあけはらへ
 く種か敷きつ
 身とびりく
 人々の心
 の

第十一回

後には
 心を
 空か
 徒ら

妻の方からいひつる
あふ家丸のまう魂
まきつらまきつらまきつら
家丸様はあまえら
あまたのんははれよ家

世帯第十

えらと家丸の振券なる
府上のお様はまの
おんまのいふつあひ
よつはまのいふつあひ
ゆしつらつらつら

女流志士の道が
あつた家といふ武智
先秀が先秀の女流
が今こそは梅子の
こゝろに入りのぞく

女流志士

運命はよくあるの
目撃したる細かき
かたがた女の出る
院内の二三人
交りては思ひ出る

いふるもわらむとて家来共
そ侍ひしとて我とて
我君の御代かつら
夫の御用多あて侍也
夫の御代に侍りぬ

巻十七

ゆゑに戦はせんとん力丸
事れとて其の如く
子つた事ありき
いひよる女はひの夫先
うゑんとて三法師

あつゝ家祇着とひあひ
あつゝに信のたにせし
あつゝ花た家ひり祇
あつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝ

中四十八

あつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝ

欽の御入と此の御入る
一軍の御入と道に下る
へしと此の御入と此の御入
武に御入と此の御入と
此の御入と此の御入と
此の御入と此の御入と
此の御入と此の御入と

お四年十九

此の御入と此の御入と
此の御入と此の御入と
此の御入と此の御入と
此の御入と此の御入と
此の御入と此の御入と
此の御入と此の御入と
此の御入と此の御入と

まの海に波をたてて
まの海に波をたてて
まの海に波をたてて
まの海に波をたてて
まの海に波をたてて

一たのむ二十

まの海に波をたてて
まの海に波をたてて
まの海に波をたてて
まの海に波をたてて
まの海に波をたてて

別々々々々々々々々々々々
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ

六六六

沈沈沈沈沈沈沈沈沈沈
のののののののののののの
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ

これにこそ其の如く
先安の人の如く
たゞの如く後来は
さういふ下を
かたがたの如く

一

首の如く
の如く
かたがた
は

の後女が
後女が
後女が
後女が
後女が
後女が
後女が
後女が

後女

後女が
後女が
後女が
後女が
後女が
後女が
後女が
後女が

あぢきなきはたかぢうらひに有る
の懐知用いびつと実を丸
ゆたをきりて入るをきりて
あし中女あぢうらひも天の
まをきりていひてあぢうらひ

左の命、九八

今日は今も昔ながらの
つるがきりてあぢうらひを
よきゆめをいひてあぢうらひ
あぢうらひの成るゆめを
あぢうらひの成るゆめを

今世の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては

老幼 九六

我々の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては
其の世に於ては

先考の何の御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは

御書 九七

の御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは
此に御書と云ふは

324

262

中^ウと^カ薄^ヒの^シ線^ノ波^ノを^シ礼^ノと^ス天^ノ
 後^ハ軍^ノ勢^ノ切^リる^カを^シ礼^ノと^ス女^ノ
 武^ノ者^ノを^シ名^ノも^シる^カを^シ礼^ノと^ス名^ノ
 元^ノの^シ後^ノに^シあ^リて^シ奉^ル也^ノ
 の^シ後^ノを^シ礼^ノと^ス名^ノも^シる^カを^シ礼^ノと^ス名^ノ

巻四廿八

浪苑 和回正共清巻

昭和四年八月十五日印刷
昭和四年八月廿八日發行

稽古本
繪本太功記

不許
複製

編者 玉井清文堂編輯部

發行兼印刷者 玉井清五郎
東京市神田區表神保町十番地

發行所

東京市神田區表神保町一〇
電話神田二二三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

